

田舎への疎開を通して感じた戦争とは？ 子どもの目にも、 日本の敗色は濃厚だった。



高橋麻里奈(たかはし・まりな)
東京学芸大学2年生
20歳

千保木 蘭(ちほぎ・らん)
郁文館グローバル高等学校3年生
18歳

荒木裕二(あらき・ゆうじ)
正則高等学校2年生
17歳

インタビュアー

「勝つてくるぞと勇ましく」 当時の世相は戦時一色でした

高橋——まずは疎開される以前の、港区内での暮らしからお話いただけますか？

松宮——私は芝で今も続く金物店の長男に生まれて、幼い頃から平和な暮らしをしていました。戦前の芝近辺は、隣近所どうしもう仲がいい、のんびりした街だったんですよ。ただ、幼稚園の頃に戦争が始まってからは、戦時一色の世相でした。お絵かきの時間に描く絵も、戦争や軍人の絵ばかりでしたから。当時は金杉橋と芝園橋の間に芝園館という大きな映画館があったのですが、真珠湾攻撃が行われたときなど、家族でニュース映画を見に行ったものです。

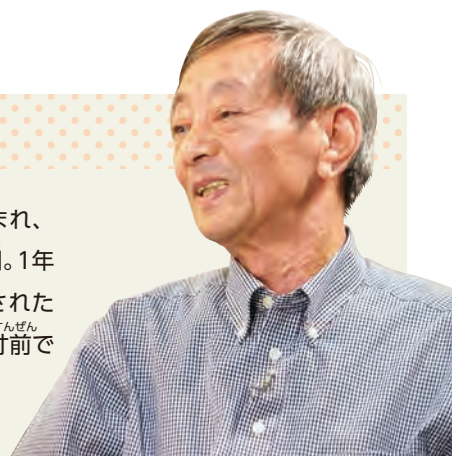
荒木——そのニュース映画に、何か感じるものはありましたか？

松宮——幼稚園の頃ですから、「いやあ、日本は強いんだなあ」と思ったくらいで。戦争

芝で生まれ育った松宮秀好さんは、戦時中の疎開政策により、新潟県新発田市に疎開されていました。小学校低学年だった松宮さんが見た戦争とは、そして疎開とは……。南方の激戦地に出征されたお父様の話や、戦後の港区が進駐軍の街だった思い出などもあわせて、さまざまな側面から語っていただきました。子どもらしい素直な目に映った光景は、当時の世相をありのままに反映しているはずです。

戦争体験者 松宮秀好(まつみや・ひでたか)さん (79歳)

昭和11(1936)年、芝生まれ。今も続く金物店の長男として生まれ、国民学校1年生時に父方の故郷だった新潟県新発田市に縁故疎開。1年5カ月間を新潟で過ごし、終戦の1週間後に東京へ戻る。召集された父は南方の激戦地ソロモン諸島のブーゲンビル島に赴き、玉砕寸前で終戦を迎えたため無事に復員した。現在も港区に居住。





良吉さんと、幼い頃の松宮さん

松宮さんの父・良吉さんが出征する前の記念写真



反対などと口にするれば非国民呼ばわりされる時代なので、ただ盛り上がっている感覚しかなかったと思います。国民学校（現在の小学校）1年生の頃には、「今日も学校へ行けるのは兵隊さんのおかげです」などと、みんなで歌っていました。男は戦争に行くことと決まりきった世の中で、それが良いの悪いの子ども同士で話すことはなかったですね。

昭和14（1939）年9月になると、父に召集令状が来て、昭和18（1943）年10月に戦地へ赴きました。出征の日は町会長が挨拶をするなど、街中で送り出したものです。みんなが日の丸の旗を持ち、芝大神宮まで歩くんですよ。「勝ってくるぞと勇ましく」と歌いながら。

千保木——お父様が戦場に行くことと決まったときは、どんなお気持ちでしたか？

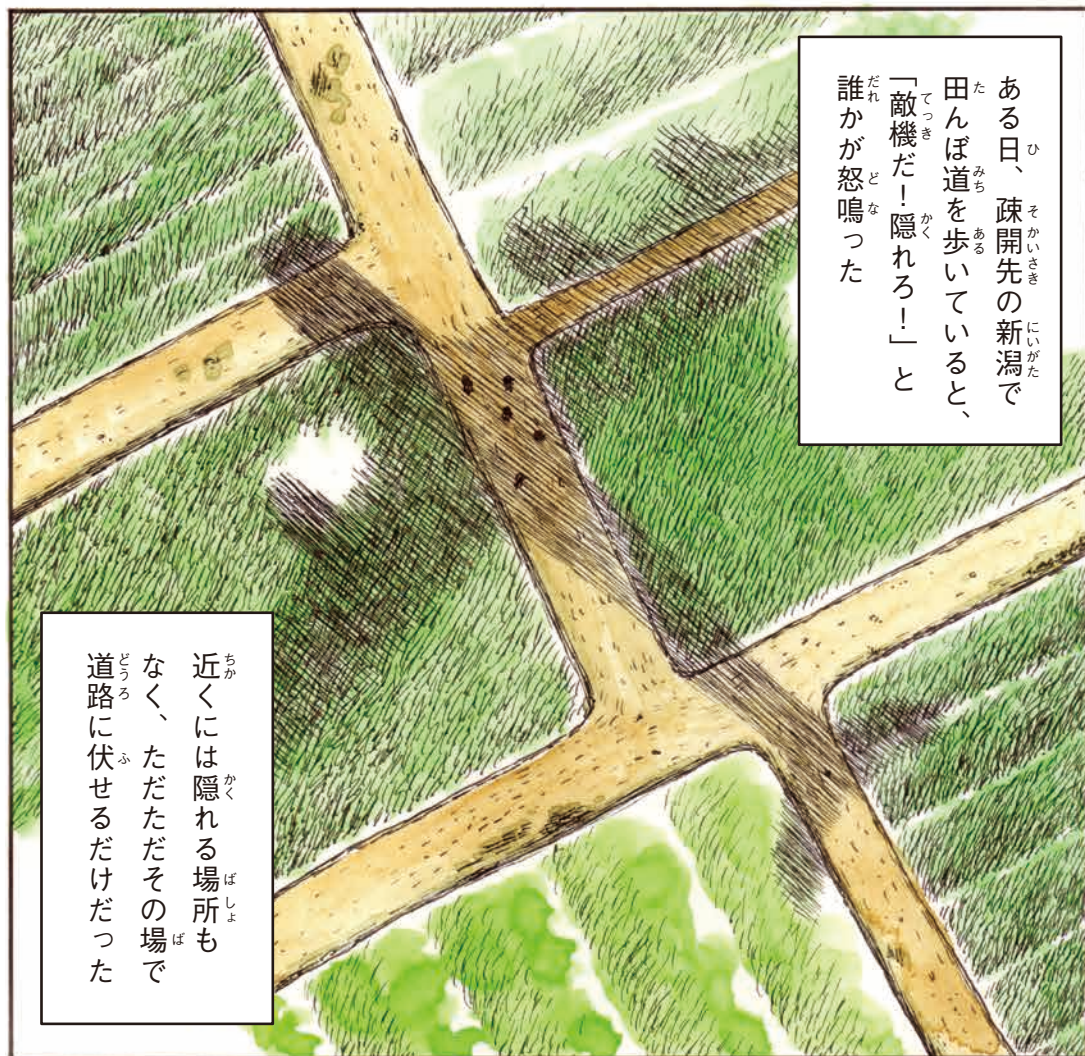
松宮——子どもなので、正直よくわからなかったですね。なんだか人がいっぱいいて、賑やかだなあと思ったぐらいで。戦争に行くことと死んでしまうなどは、考えられなかったですね。

高橋——お父様の出征後、お店はどうなったのですか？ 戦時中は金属を集めたという話も聞きましたが。

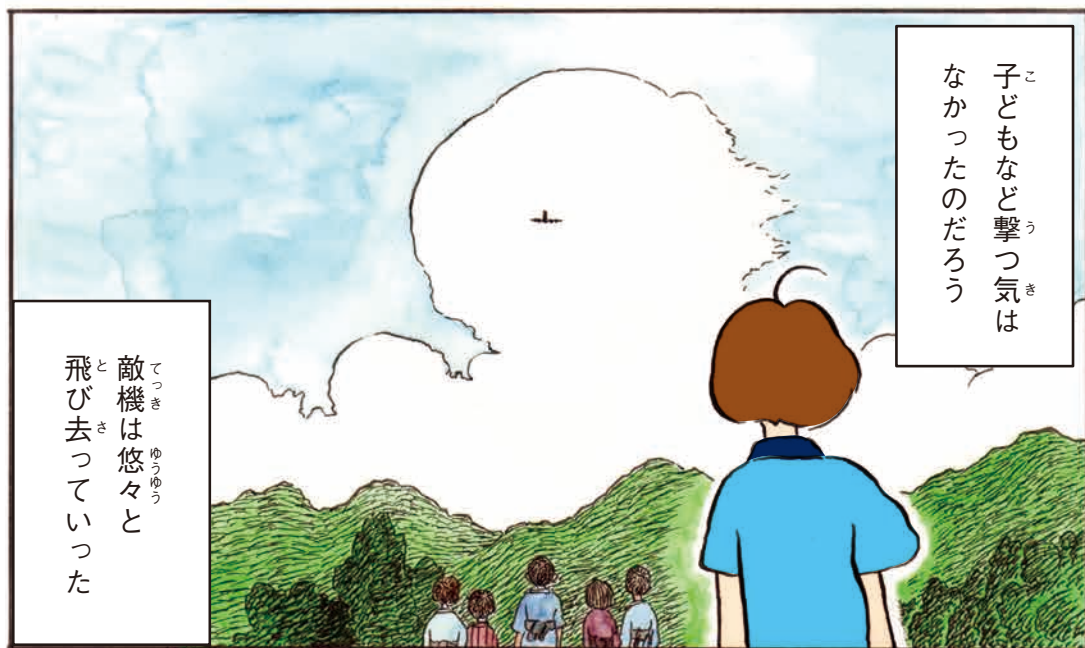
松宮——店は、祖父が一人で切り盛りしていました。金属類の供出は、昭和18年ぐらいから始まりましたかね。うちも金属製だった2階の窓柵を供出し、木製に換えたことを覚えてます。店の商品は大丈夫でしたが、金属類の生活物資は軒並み持っていけなかったよ。強制ではないものの、供出しなければいけないような雰囲気だったんですね。

荒木——戦後、復員されたお父様から戦地の話は聞かれましたか？

松宮——それはもう毎日のように。子ども相手なので、勇ましい話ばかりでしたよ。父は山本五十六が戦死したブーゲンビル島にいたのですが、上空で零戦が敵機と交戦する様子など……。あの一带は、精鋭部隊として知られたラバウル航空隊の制空圏内でしたから。ただ、実際には厳しい日々だったようです。同じ部隊の方が出版した本によると、6千人だっ



近くには隠れる場所もなく、ただただその場で道路に伏せるだけだった



※マンガは、現代の若者が戦争・戦災を追体験するというコンセプトで描かれています。

た部隊が戦闘で半減し、食料も尽きたため、昭和20（1945）年8月20日に玉砕攻撃を予定していたそうです。8月15日の終戦があと数日遅ければ、部隊全員が玉砕していたかもしれません。

周囲からよそ者扱いされながらも 自然の中で楽しく過ごした疎開生活

千保木 — その後は、新潟県に疎開されたのですよね？

松宮 — 昭和19（1944）年の3月中旬、国民学校1年生の終わり頃に、父の出身地だった新潟県新発田市の親戚宅に縁故疎開しました。祖父母は店があるので東京に残り、疎開したのは母と私、弟たちです。ほどなく近所の一軒家が借りられたので、私たちの家族はそちらで暮らすようになりました。

千保木 — 荷物は何を持って行きましたか？

松宮 — 手荷物以外の大きな物は、国鉄（郵便小包）で送りました。ひな人形や五月人形のセットなど、そんな物まで持っていくのかと思いましたよ。

千保木 — 疎開先で、子どもが寂しい思いをしないようにと思われたのかもしれないね。

松宮 — そうでしょうね。都会から疎開してきた子どもは、同級生では私だけでしたから。なので、居心地が悪いなんてものじゃなかったですよ。

荒木 — いじめなどがあったのですか？

松宮 — それはなかったですが、上級生からはしょっちゅう、「東京の人間は遊ん

で暮らしている」と言われました。あれが一番嫌でした。僕の家は商売をしていましたし、遊んでなどいらないと言いたかったけれど、あまり聞く耳を持たないので諦めました。

当時はね、私たちが道を歩いているだけでも周囲からジロジロ見られるんですよ。服装も田舎とは違うし、一目でよそ者だとわかる感じだったんですよ。学校でも街中でも、招かれざる客のような雰囲気は子ども心に感じたものです。

それに、食べ物がない時代でしたから。米ごろの新潟とはいえ、軍隊に供出する分を除くと、自分たちが食べる分ギリギリしか残らない。なのに、疎開してきた家族にも食べさせなければならぬわけで……。お米が足りずに困った母は、近所の人に着物を渡し、お米と交換してもらっていたようです。3年生の夏頃には、弁当がお粥になった日もありましたよ。お粥の弁当なんてクラスでも自分だけでしたが、悲壮感のようなものは感じなかったですね。

千保木 — 学校での日々や生活が、ずいぶん変わったのですね。

松宮 — 学校は楽しくて、行きたくないと思ったことは一度もなかったですよ。表立って疎外されるようなことはなかったんで、そうした雰囲気を感じていただけで……。

遊び方も、東京とはまったく違いましたね。雪国なので、冬になると雪の斜面があちこちでできるんですよ。そこを、竹で作った下駄をスキーのようにして滑り降りる。あれは楽しかったなあ。疎開先の生活を描いた『少年時代』という映画がありましたけれど、本当にあんな感じでした。

コラム 21 ● 疎開（そかい）

空襲の被害を避けるため、昭和18（1943）年から官庁、軍需工場、民間企業、住宅家屋、人員を全国各地に分散させた措置。非戦闘員である女性・子ども・老人などが対象の人員疎開には、親類縁者・知人を頼る縁故疎開と、学校・クラス単位での集団疎開（学童疎開）があった。戦況が悪化した昭和19年には、政府方針もあって大都市部で急速に進んだ。縁故疎開を原則としつつも、国民学校初等科3～6学年の児童は半強制的に、空襲の標的になりにくい地方農村部に移された。疎開児童の総数は、40万人以上に及ぶ。



長野県上田市の良泉寺に疎開している生徒たちの食事風景。昭和19年1月1日撮影（提供：昭和館）



明徳幼稚園での、教室の一風景

松宮さんが幼稚園時代に描いた絵。先生には「なんでも自由に描いて良い」と言われたが、特に疑問にも感じず戦車を描いていたそう



田舎の田んぼ道にまで敵機が…… 子どもながらに敗戦を予感した日々

高橋——疎開先でも、戦争を感じることがありましたか？

松宮——ありましたね。田んぼの横を集団で歩いていたら、「敵機が来たから隠れろ！」と誰かが怒鳴って。田んぼの真ん中で隠れる場所などないから、ただ道端に伏せていました。1機だけでしたが、私の目にもはっきり敵機と分かる距離だったので、向こうからは丸見えだったと思いますよ。同級生には、戦闘機に撃ちまくられながら逃げまわった生徒もいました。何度も追いかけてきて、すごく怖かったそうです。子どもなんか撃っても意味はないので、相手は遊び半分だったんでしょうね。

その頃はイタリアが降伏し、ドイツが負け、サイパンやグアムが陥落し、沖縄も……という情勢でしたから、子どもながらに、「大本営発表というのは嘘なんじゃないか？」と思うようになっていました。いつもラジオで聞いていたのですが、「敵巡洋艦3隻轟沈、我が軍の損害軽微なり」などと言われても……。それほど強いのに、どうして日本の空に敵の飛行機が飛んでくるのだろうか、不思議で仕方なかったですよ。

荒木——玉音放送も、そのラジオで聞かれたのですか？

松宮——それが、当日はラジオが壊れていたのか、聞いた覚えがないんです。それだけは、今も心残りですね。田舎なので隣の家までは50メートルぐらい離れていますし、すぐには戦争が終わったと分かりませんでした。



ちょうど、田んぼの上空を飛んでいる零戦がいましてね。搭乗員のゴーグルが見えるほど低空を、ゆっくりと飛んでいて。何をしているのか不思議でしたが、今思えば、あれも終戦の影響だったのでしょうか。あの零戦はどこへ行ったのだろうと、いまだに思い出しますよ……。

千保木——終戦は、どうやって知ったのですか？

松宮——あの日（8月15日）は、母が所用で校長先生のご自宅に伺ったんですね。そこで、戦争が終わったと知らされたそうです。母から聞いたときは、嬉しかったですね。不謹慎な話かもしれませんが、「これで東京に帰れる！」と。

周りの大人たちも、ホッとしたのでしょうか。新潟をたつまでの間、みんなが「疎開で、苦労したな」と、いろいろごちそうしてくれました。食べ物など先行きの不安がなくなったからでしょうか、本当はいい人たちなんですよ。

東京へ帰るのは、大変でした。明るいうちに家を出て、駅まで一里（4キロメートル）ほど田舎道を歩き、駅で夜明けを待って朝一番の列車に乗り、東京に着いたのはもう夜。丸一日以上かかりました。しかも列車内はぎゅうぎゅう詰めで、まったく座れませんでしたから。

着いたときは真っ暗で、街灯もないからなかったのですが、翌日に家の外を見て驚きました。周囲の、何もかもがなくなっていて……。みんな焼けてしまったんですね。芝二丁目の自宅から、日本電気（芝五丁目）や慶應義塾大学（三田二丁目）まで見通せましたから。まさしく焼け野原で。家があったらしい跡に水道の蛇口だけが残っていて、そこから水が漏れていた光景をよく覚えています。

コラム 22 ● 金属供出 …… 金属類回収令

日中戦争が長期化しつつあった昭和13(1938)年、政府は兵器生産に不可欠な金属類不足から、不要不急な金属類の回収を開始した。当初は自発的な供出だったが、太平洋戦争が勃発した昭和16(1941)年には、国家総動員法に基づく“金属類回収令”として法施行された。金属製品は鍋やヤカンから玩具、寺院の鐘や銅像まで、根こそぎ対象に。家庭では陶製の湯たんぽや調理器具、竹製スプーン、布製バケツなどが代用品となり、寺院には石やコンクリート製の代替梵鐘が吊された。戦争末期には、渋谷の忠犬八公像も供出となった。



街中に設置された回収物置き場(出典:『写真週報』165号、提供:アジア歴史資料センター、国立公文書館蔵)

覚えた英語は「ギブミーチョコレート」 進駐軍が席卷していた終戦後の港区

荒木——その光景を見たときに、どう感じられましたか？

松宮——戦争に負けたんだと、実感しましたね。「鬼畜米英、出てこいニミッツ、マッカーサー」がやはり言葉のようだった学校でも、校長先生が「進駐軍が来るので、明日からハローと挨拶しましょう」と言うわけです。あれには驚きましたよ。それまで「鬼畜生」呼ばわりしていたのに、いきなり「ハロー」ですからね。

教科書も、戦争や戦闘に関する記述はすべて墨で塗りつぶしました。国語はもちろん、音楽の教科書も戦争の歌だらけでしたから。算数の例題にも「戦車が○台で兵士が○人」などの問題がたくさんあって、それもすべて消すんですよ。

高橋——同級生に会えたときは、やはり嬉しかったですか？

松宮——それはもう、嬉しかったですよ。みんなが次々と疎開先から戻り、毎日のように「今日は○○ちゃんが帰ってきた」と大騒ぎでした。新潟の同級生も手紙をくれて、私も「東京は進駐軍がいっぱいで」などと返事を書くわけですよ。そんな子どもの手紙まで、進駐軍は検閲していたのですけれどね。向こうから届いた手紙にも、「検閲済」のハンコが押されていました。

港区の街中は、本当に進駐軍が多かったですよ。芝浦の棧橋に着いた船から、銀座へ向かうルートだったので。私が最初に覚えた英語も、「ギブミーチョコレート」と「ギブミーガム」でした。米軍兵士たちは1枚や2枚じゃなく、束のまま放ってきますから。子どもながらに、「鬼畜米英と言っていたけれど、みんな優しいじゃ

ないか」と思ったものです。「コンビーフやソーセージの缶詰が配給されたときなど、」「こんなにうまいものを食べている国と戦って勝てるわけがない」とも思いましたよ（笑）。

もちろん、戦後らしく厳しい一面もありました。芝四丁目交差点にMP（憲兵隊）の詰所があり、芝浦方面向かう車などを調べていたんですね。私が芝浦のほうへ遊びに行くときも、憲兵がポケットの中身を出させて、おかしなものを持っていないか確認するんです。そうした日常すべてが、「日本は負けたんだな」と痛感させるものでした。

高橋——東京に残られた祖父母は、ご無事だったのですか？

松宮——ええ、おかげさまで。芝公園の、今はテニスコートや野球場になっているところが陸軍の高射砲陣地で、空襲時はさかんに高射砲を撃っていたそうです。でも、B29は上空1万メートルくらいを飛んでいるのに、日本の高射砲は7千メートルまでしか届かない。当たるわけがないんですよ。そんな話も（祖父母から）聞きましたね。

高橋——あらためて振り返ると、疎開についてはどのような印象を抱かれていますか？

松宮——良い面も悪い面もありましたが、自然の中で過ごした経験はいい思い出です。自分が新潟にいた昭和19（1944）年の冬は、二階建ての家が屋根まで雪に埋まるほど大雪だったんですよ。その何メートルもの積雪を、3月の終わり頃に村じゅう総出で川に流す。すると、「斉に青い芽が吹いてきて……。あの光景は印象的でしたね。一気に春の訪れを感じるような。都会で生活していた者にとっては、四季の移り変わりを体感できる暮らしが新鮮でした。

松宮さんからのメッセージ

するべきではないものですよ、戦争は。費用対効果を考えても、兵士1人に何百万円も費やすなら、他の使道があるはずでしょう？ 激動の時代は過去として、平和な日本が続いてもらいたいですね。若い人たちが疎開するような時代は、来てほしくない。私自身は、当時のことや戦争について、実はあまり話したくないんですよ。ただ、町会役員でも長老の部類になった今、みんなが戦争や戦時中の生活を知らないことに衝撃を受けまして。自分が知っていることを語り継ぐことで、何かしら平和の役に立つなら嬉しいですね。

コラム 23 ● 進駐軍（しんちゅうぐん）

昭和20（1945）年8月14日、日本はポツダム宣言を受諾し、イギリス、アメリカ、ソ連、中華民国ほか数力国からなる連合国軍の占領下に入った。ポツダム宣言を執行するべく日本に設置されたのが、ダグラス・マッカーサーを初代最高司令官とする連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）だ。日本では「占領軍」という言葉を避けて「進駐軍」と呼ばれることが多く、ジープで移動する米兵に、当時の日本の子どもたちは「ギブ・ミー・チョコレート」と言って手を差し出した。東京に総司令部を置いたGHQによる統治は、昭和27（1952）年4月28日のサンフランシスコ条約発効で終了。これによって日本は主権を回復した。



進駐軍と日本の子どもたち（提供：昭和館）

INTERVIEW ● 飯塚義一さん・篠倉正信さん・八木達也さん

食糧難、物資不足の日々を
子どもたちと懸命に生き抜きました。



白塚美歌(しらつか・みか)
清泉女子大学1年生
19歳

インタビュアー

堀内史誉(ほりうち・ふみたか)
東海大学3年生
21歳

インタビュアー

戦時中も児童たちには 「人間平等」を伝えていました

堀内——飯塚さんは戦争当時、小学校の教師をされていました
が、教育現場ではやはり戦争の影響を強く感じられましたか。

飯塚——あの時はどこで何をしていたとしても戦争の話ばかりでしたからね。ただ、教室で子どもたちを教えるときは、私は戦争の話はしませんでした。私も当時の校長も子どもたちには「人間は

昭和19（1944）年当時、小学校教師だった飯塚義一さんは子どもたちを伴い、現在の調布市へ集団疎開します。戦後は戦災で家を失った子どもたちが暮らす「戦災児学園」へ。厳しい食糧難の中を、児童たちの兄代わり・親代わりとなって過ごした日々を語っていたきました。また、疎開中や戦災児学園での暮らしは、当時児童だった篠倉さんと八木さんからもうかがいました。「疎開中や戦後は、さぞつらい経験をしたのだろう」と覚悟して臨んだ聞き手の学生たちは、自分たちの想像を超えてたくましく生き抜く3人の姿を知ることになります。

戦争体験者

飯塚義一

(いづか・よしかず)さん (92歳)

大正13(1924)年、麹町生まれ。昭和18(1943)年10月より青南国民学校(現・港区立青南小学校)の教師となる。翌年、神代村(現・調布市)へ児童たちと集団疎開。その1カ月半後、軍人になるため群馬県前橋市の陸軍予備士官学校へ。卒業後、千葉県の大貫で終戦を迎える。戦後は教員に復帰し、「沼津戦災児学園」に赴任。現在は杉並区に居住。

篠倉正信

(しのくら・まさのぶ)さん (83歳)

昭和8(1933)年、青山生まれ。昭和19(1944)年、青南国民学校の5年生時に担任の飯塚先生に引率されて神代村へ集団疎開。終戦まで疎開生活を送る。現在は渋谷区に居住。

八木達也

(やぎ・たつや)さん (81歳)

昭和10(1935)年、王子生まれ。昭和19(1944)年5月、沼津の「東京都立沼津戦時疎開学園」へ。その後、府中へ再疎開し、終戦を迎える。戦後は、「沼津戦災児学園」へ。ここで飯塚氏と出会う。現在は杉並区に居住。



平等なのだ」ということを伝えていました。

堀内—— そうなのです。当時は軍国主義教育が行われていたと聞いていたので意外です。

八木—— 戦況を詳しく話して聞かせてくれる先生もいましたよ。

篠倉—— 当時の教科書の内容はあなたがおっしゃるとおり、軍国主義そのものでしたが、実際の授業の中身は先生の裁量によるところが大きかったです。いろんな先生がいて、中でも飯塚先生は自由な授業が多かったです。

飯塚—— 私は昭和18（1943）年10月1日付で、旧赤坂区（現・港区）の青南国民学校に赴任になったのですが、そのとき4年生にいたのが篠倉君たちです。19歳の先生と10歳の児童ですから、年の離れた兄と弟みたいなものですね。翌年4月からは5年生の担任で、また篠倉君たちを受け持ちました。その年の8月に集団疎開が始まりました。疎開先は神代村といって、現在の東京都調布市、京王線の仙川駅やつつじヶ丘駅の近くです。先生と児童がいくつかのお寺や校舎に分かれて集団生活を送りました。私のクラスは「神代学園」という学校の一教室（入間寮）と呼ばれていた。に畳を36畳敷き詰め、全員で寝泊まりしました。食事や勉強は、折り畳みの机を出してきて並べてやりました。体育の授業は、跳び箱の一つもなかったもので、かけっこや相撲、逆立ちなど道具を使わずにできるものを考えてやっていました。

白塚—— 子どもの立場から、疎開生活はつらくありませんでしたか。

篠倉—— 私自身はつらかった思い出はありません。それよりも、神代村はすぐ隣が世田谷区で、「こんなに東京に近くて大丈夫のかな」と思った記憶



※マンガは、現代の若者が戦争・戦災を追体験するというコンセプトで描かれています。

コラム24 ● 戦時疎開学園（せんじそかいがくえん）

東京都では昭和19（1944）年3月10日、国の学童集団疎開に先駆けて、「戦時疎開学園」の実施を決めた。戦時疎開学園とは、親戚を頼っての縁故疎開が困難な児童を対象として、教員と児童、寮母が共同で疎開生活を送るもの。疎開先は東京近郊の他県で、養護学園、林間・臨海の施設などが利用された。一方、国の学童集団疎開では関東周辺部・東北・上信越の寺院や旅館、校舎などに、学校単位で移動した。戦災被害が著しくなって以降は東京では戦災孤児のための施設を、赤坂区では焼失家庭のための「戦災児学園」を設営、これは昭和22（1947）年3月末まで続いた。



東京都立沼津戦時疎開学園（現・沼津市文化財センター）（提供：沼津市教育委員会）

飯塚——あの頃は20歳になると、男は軍隊に行かねばならなかったのです。ある豆腐屋さんに召集令状が来た時に、「自分は軍人ではなく豆腐屋を続けたい」と言ったら、憲兵にその場で射殺されたという話も聞きました。それほど、兵隊になることは避けられないことでした。当時、私は教師として子どもたちに戦争の話などをしませんでした。個人としては「撃ちて止まむ」といった軍国主義的な考え方のもと行動することを覚悟はしていました。それで、どうせ入隊するのであれば士官になるべきだと考えて、特別甲種幹部候補生に自ら志願したのです。特別甲種幹部候補生というのは、大学生などを1年ほどの訓練で下級将校に速成教育する制度です。試験に際しては、「軍人勅諭」の全文を丸暗記しました。すべてを暗唱すると15分もかかる長文です。それを児童たちが寝静まった夜に必死で頭に詰め込みました。

白塚——予備士官学校での訓練はやはり厳しいものでしたか。

飯塚——ひと言では言い表せないくらい大変でした。前橋陸軍予備士官学校での訓練は、相馬原演習場で受けました。冬場はマイナス14度にもなる場所です。ぬかるんだ地面が凍って、つるはしで1時間叩いても5センチメートルほどしか掘れません。そういうところで「伏せー」と言われれば腹這いにならねばなりません。お腹が冷えてひどい下痢もしました。とにかく体が凍えるほど寒かったこと、常に空腹だったことは忘れられません。食事はアルミの食缶に1杯と汁物と若干のおかずでした。おかげで入校したときは18貫(約68キログラム)あった体重が、訓練で14貫(約53

発煙筒を焚いての、本格的な避難訓練の様子(入間寮にて)



疎開先の入間寮での、食事中の風景

があります。ただ、食糧難でお腹は減っていましたね。入間寮の周りは全部畑で、作物がたくさんできるので、子どもたちはこっそり大根やサツマイモを取っては食べていました。私たちが作物を勝手に食べていたことは農家の人も知ってはいたはずですが、一度も怒られたことはなかったです。見て見ぬふりをしてくれたのでしょうか、ありがたいですね。

堀内——小さな子たちもいたと思いますが、寂しがったりはしていませんでしたか。

篠倉——低学年のクラスでは多少あったみたいです。3年生と4年生の合同クラス50人、60人が全員いなくなり、大騒ぎになったことがありました。東京へ帰るのに最寄り駅から電車に乗ると見つかってしまつので、わざわざ離れた千歳烏山駅まで歩いて乗ったそうです。渋谷から先は歩いて青南国民学校まで帰ったことを知り、先生たちは驚いていました。他にも、甲州街道を東京に向かって、一人で歩いているのを見つかった子などもいて。でも、全体としてはおおむね楽しく、みんな仲よく疎開生活をやっていましたよ。

飯塚——私が篠倉君たちと疎開生活を一緒に過ごしたのは1カ月半だけでした。昭和19(1944)年9月30日、私は子どもたちと別れて、軍人になるため前橋陸軍予備士官学校へと向かいました。お別れの日、全疎開児童が線路の両側の土手に並んで、私の出征を祝って一斉に日の丸の旗を振ってくれました。その光景は今でも目に焼き付いています。

児童から届いた360通の手紙に 何度も勇気づけられました

堀内——どうして教師を辞めて士官学校に入ったのですか。

コラム25 ● ポツダム宣言 (ぼつだむせんげん)

昭和20(1945)年7月26日にアメリカ、イギリス、中国の首脳が日本(当時は大日本帝国)に対して発した、全13か条から成る宣言。その内容は「全日本軍の無条件降伏」などを求めたもの。ドイツ・ベルリン郊外のポツダムで首脳陣の話し合いがもたれたことから、この呼び名がある。正式には「日本への降伏要求の最終宣言(Proclamation Defining Terms for Japanese Surrender)」。日本は他国が降伏した後も交戦を続けていたが、この宣言を受諾することにより敗戦し、第二次世界大戦は終結した。



米海軍ミズーリ号艦上での日本の降伏文書への調印式。日本代表として降伏文書に署名をする日本の重光外務大臣。昭和20年9月2日撮影(提供:昭和館)



前橋陸軍予備士官学校入校式の様子



特別甲種幹部候補生試験に合格し、親族にあいさつ回りをする飯塚さん(写真中央)



出征中の飯塚さんに宛てた、児童たちからの手紙

てくるという情報があり、私たちはその上陸を迎え討つための準備をしていました。ところが、なにせ武器が一つもありません。仕方がないので、東京の焼け跡にトラックで行き、鉄屑を拾って帰って、鍛冶屋にやりの穂先を作ってもらったこともあります。カシの棒の先にそれを付けて、海岸でやりを使った訓練をするのですが、「こんなもので敵の戦車や銃とどうやって戦うのだろう」と思いました。それから間もなく、たしか昭和20年8月10日だったと思いますが、共同通信社の社員だった中隊長から「ポツダム宣言で、日本が無条件降伏する」という話を聞きました。終戦日の15日正午は、天皇陛下の玉音放送を大貫の映画館に集まってみんなで聞きました。そのときようやく「ああ、戦争が終わったのだな……」という実感が湧いてきました。

白塚——終戦後はどうされたのですか。

飯塚——郷里に一度戻りましたが、青南国民学校の校長から「そろそろ戻らないと、教員資格がなくなるぞ」という手紙が来て、10月から復帰しました。12月までは、戦争で住むところをなくした子どもたちが暮らす、調布の都立神田高等家政学校(家庭学寮)

戦後は食べるために 児童と一緒に働きました

白塚——飯塚さんは終戦のときは覚えていらっしゃるでしょうか。

飯塚——昭和20(1945)年の夏頃になると、千葉の館山に米兵が攻め

キログラムになりました。厳しくつらい訓練の中で、心の支えになったのは疎開先の児童たちから届く手紙でした。

堀内——児童たちからの手紙は、どんな内容でしたか。

飯塚——学校でどんな勉強をしたとか、学級の誰々がどうしたとか、日常の何気ない出来事が多かったですね。予備士官学校にいた10カ月の間に毎日1〜2通ずつ、計360通も届きました。学校の他の者は、家族から月に1通届けば良いほうですから、とてもうらやましがられましたね。今でも大切な宝物です。保管しておいた手紙は、調布の疎開の暮らしを知る資料として役立ててもらうため、調布市の郷土史家の方に寄贈しました。

堀内——篠倉さんも飯塚先生に手紙を出されましたか。

篠倉——出しました。後になって飯塚先生から「君の手紙も取ってあるよ」と見せていただいたところ、10月17日と18日がお祭りで、太鼓を打ったりお神輿を担いだりさせてもらったことや、疎開している私たちを喜ばせようとして、地元の人が神社で芝居を見してくれたことなどが書かれていました。

飯塚——子どもたちの手紙には、本当に何度も励まされました。

コラム26 ● 戦後の教育の変化

戦時中は、軍事色の濃い内容の教科書を用いて「軍国教育」が行われていた。しかし、敗戦を機に文部省はその方針を改め、「新日本建設ノ教育方針」を示して民主的・文化的教育への転換を図った。新しい教科書ができるまでは戦時中のものを用いたが、その際、児童自身の手で、戦争を称えたり戦意を鼓舞する内容の部分に墨汁を塗って修正させた。これを「黒塗り教科書(墨塗り教科書)」という。大部分が黒く塗りつぶされて読めなくなった教科書や、丸ごと燃やされてしまった教科書もあった。昭和22(1947)年には学校教育法が定められ、教育制度が一新された。



一部が墨汁で塗られた教科書(港区立教育センター蔵)



飯塚さん・篠倉さん・八木さんからのメッセージ

今の若い人たちは良い時代に生まれて、良い生活ができてうらやましいです。私は軍隊に入ったことで、本当にやりたかった教師の仕事を1年しかできませんでした。終戦によって復職できましたが、戦争とは個々人の夢や幸せを壊していく恐ろしいものだと思感しました。二度とあんな戦争を起こさないでください。平和が本当にありがたいものであることを皆さんには忘れないでもらいたいです。——飯塚さん

.....

「絶対に戦争はしてはいけない」ということを、若い世代の人たちに強く訴えたい。憲法9条の素晴らしさを今一度、再認識して、これからも守っていただきたいというのが私の切なる願いです。——篠倉さん

.....

戦中、戦後のあの苦しい時代を、私はよく生き抜いてこられたなと思います。疎開先や戦災児学園がなかったら、今こうしてここにはいらなかったでしょう。飯塚先生の教えとともに、後世に語り継いでいかなければと思っています。——八木さん

というところで集団疎開の続きをやっていました。私はそこに下宿させてもらい、青南国民学校に通いました。その後は、沼津の「戦災児学園」に赴任しました。ここは、元は赤坂区所管の臨海学園だった建物を、赤坂区内5校の児童たちを疎開させるために「戦時疎開学園」にしたものです。戦後は、「戦災児学園」として戦争で家をなくした子どもたちの共同生活の場として使うようになりました。私自身も住むところがなかったため、ちょうどいいと思い、自分から赴任を志願しました。そこに、5年生だった八木君がいました。

八木——私は「戦時疎開学園」だった頃から沼津に疎開していました。戦後は戦災で自宅が焼失してしまったため、「戦災児学園」に応募したのです。飯塚先生が来られた当時は、5年生と6年生の複式授業でした。飯塚先生は5年生に問題を解かせている間に6年生を教えるなどして、両方の授業をされていました。

堀内——そこではどんな生活だったのですか。

八木——とにかく「働くこと」を教わりました。戦時中より戦後の方が、食糧難や物資不足はきつかったのですよ。ですから、生きるためにはどうすればいいかを、教師も児童も一緒になって体験しました。たとえばご飯を炊くための薪が必要になったとき墓地の枯れ松を「吊るし切り」しました。これは、切った枝が下に落ちて墓石を傷つけないよう紐で結わえておき、先生が松にのぼって切るのですが、子どもたちは下で紐を引っ張ってお手伝いしました。他にも海水から塩を作る方法や、それを農家の人のところへ持って行って食べ物と交換することなども教わりました。勉強では、好きな小説を読む時間があったり、xやyを使った難しい数学を教わったり。戦災児学園での生活は、厳しい労働と楽しい授業で成り立っていた印象です。

飯塚——沼津では、本当に朝から夜まで24時間、児童たちと一緒にいたんですね。そんな生活が昭和22（1947）年の3月まで続きました。

私の疎開体験

● 鵜飼るり子さん（80歳）

私が小学校3年生のころは、太平洋戦争の真っ最中だった。父は軍人で支那（中国）に派遣されていた。東京もだんだん危なくなり、祖父母、兄を残し、知人を頼って福島に疎開することになった。母と2人の姉、私の4人だった。

上野から夜行列車に乗り翌朝福島駅に着くと、バスに乗り換えた。バスは阿武隈川沿いをひた走り、やがて終点岩代川俣駅に着いた。そこから山の奥に向かってひたすら歩いた。峠をいくつも越えてわらびき屋根の知人の家に着いた。「まずめしを炊いてやれ」とおじいさんが言うとおばあさんが真っ白いほかほかのご飯と、いろりで湯気を上げていたしみ豆腐の入った味噌汁、そしてたくあんを出してくれた。そのおいしかったこと、今でも忘れられない。私たちが借りたのは岩代川

俣駅近くの小川のほとりに建つ下宿屋さんの二間だった。

学校はとても遠かった。担任の女先生は美しく優しい人で、「仲良くしてあげなさい」と近所の久子ちゃんを紹介してくれた。

久子ちゃんは毎朝「るりちゃん！」と迎えに来てくれた。女の子たちは皆仲良く遊んでくれた。校庭で堆肥を作ったり、山に松の根を掘りに行ったり、皆で作業をした。山に枯れ枝を集めに行った時は皆で少しずつ取ってくれたので束が軽くなり、私は楽に山を下りた。とてもうれしかった。

ある日、一人で帰る途中、草むらから4、5人の男子が飛び出してきて「疎開っ子帰れ」「東京へ帰れ」と石を投げてきた。私は必死で走って帰った。

朝食はいつもカボチャ、それもポクポクの栗カボチャで、喉につまりそうでお腹一杯食べられない。夕食は肉も魚もなく何を食べていたのか思い出せない。

ある時、隣の席の女の子が新聞紙の包みを

出して「あげるよ」と言った。あけてみると

しみ餅が10個ほど入っていた。ヨモギが入ったお餅を干したもので保存食なのだが、水に浸して焼いてお醤油をつけて食べると本当においしかった。国語の時間に先生に指されて読めない時にその子に小声で教えてあげていたのがうれしかったようだ。そのお礼だった。私は前にも増して一生懸命教えてあげた。そして「あれある？」と聞くと「うん」と言っていて、またたくさん持ってきてくれた。いまにしてみれば後ろめたい思い出である。

5年生の時、担任の先生が戦地から帰ってきた若い男の先生に代わった。私たちは毎日軍歌を歌いながら校庭を行進させられた。

先生の親戚の男子が副級長になり「ひいきだ」と女子が騒ぎ出し、男子がそれに応戦して教室は大騒ぎになった。私は一番後ろでこの騒動を眺めていた。戸が開いて先生が入ってくると「何を騒いでいるんだ」と怒鳴った。男子がわけを話すと「るり子ちょっと来い」と言った。私は少し驚いたが、何かしらと思

集団学童疎開

● 田口一男さん（82歳）

昭和19年夏の終わりごろ、小学5年生の私と小学3年生の弟と2人で集団学童疎開に栃木県川治温泉に行った。家族は両親と姉1人妹1人弟3人の8人。今なら大家族でしょうが当時は普通だった。

このころは東京の街並みも特に変化も無く、たまに空襲警報のサイレンが鳴るぐらいで安心して出発した。疎開先のホテルでは特に不自由は無いが、育ち盛りの子どもにしては常に腹をすかして何日も食べ物のことが頭から離れない。

その後東京から便りが来るたびに空襲の激しさが伝わって来る。

両親と姉からの手紙にて、昭和20年3月9日から10日にかけて白金三光町の家が爆撃を受けて焼失した模様が伝えられた。涙が止まらなかった。時々夜眠れずに家のことを思った。その後近くに引っ越していた家がまた5月24日爆撃を受け焼け出されたとのこと。何



疎開先の学校へ登校する子ども（出典：『写真週報』311号、提供：アジア歴史資料センター、国立公文書館蔵）

と言っていいか分からず、悲惨な気持ちで過ごしていた。8月15日の昼ごろと思うが、全員集合で玉音放送をラジオで聞いた。戦争が終わったぐらいのことしか分からなかった。昭和20年の秋ごろだと思うが、集団帰京することになった。

東京に着いて山手線で品川駅に着く途中、車窓からの焼け野原の街並みを見て一生忘れられない衝撃を受けた。この思いが今でも頭から離れない。戦後の食糧難の時代があったことも忘れない。

へなお昭和20年3月9、10日の我が家の惨状については両親に聞いてはいるが、生の声で聞けるのは姉の体験談「真っ赤な空（P.148を参照）がある」

東京大空襲から玉音放送 まで（昭和20年3月10日から8月31日まで）

法木義幸さん（82歳）

「オイッコフ！ すぐ家へ帰れ」と怒鳴られました。

憲兵のおじさんだったのかな。

昭和20年3月10日、愛宕山の男坂の一番上です。

5・6歳のころから、セミ採りや男坂と女坂の間の崖で冒険ごっこを年中やっていたので、山の隅々はよく知っていました。

「ハイッ」と答えて帰るふりをして、また崖の中から空を見上げていました。B 29が爆音高く西から東へ飛んでいました。B 29の最前部は飛行士がいて、私の目で見えるほどの低空飛行でした。

「ギイーン」と音がして黒い塊が落ちて、それが途中で38発の焼夷弾（後で知りました）に分裂して落下したのです。

当時日本は、ほとんど木造住宅ですから、一瞬の間に火の海です。

東（江東・墨田方面）の空は赤と黄に染まり、まぶしくてたまりませんでした。どこの家も縁の下に穴（防空壕）を造り、空襲のサイレンが鳴るたびに防空ずきを被って入ったものです。

爆音が大きく聞こえるようになると母は私にかぶさってくれました。

母の乳房が重く感じました。

父が夜回りから戻ってきて「今日は爆弾ではなく、焼夷弾だ。浅草の方が大変のようだ」と言っているのを聞いて、穴の中では逃げきれないと思い、母の手を振りきって「俺が見てきてやる」と言いつて愛宕山へ行ったのです。

戦況が悪くなるにつれ、女性と子どもは疎開するようになっていました。私も縁故疎開で千葉県へ行ったのですが、居心地が悪く、千葉も東京も大差ないと思い小学校5年の3学期から東京に戻ってきていたのです。

大空襲から5日後、第2次集団疎開が実施され、強制的に参加させられました。

栃木県の川治でした。山の中で景色も良く、着いた日は岩風呂にゆつくり入りました。ところが迎えてくれた冒険ごっこ仲間のほおは

こけ、目だけキョロキョロしているのを感じました。

疎開先では、2人で1つの布団に寝ました。食べ盛りの子どもには、とても足りない食事でした。

6月ごろからコーリヤン（当時は豚のえさ）が主食になりました。食べたものが、そのまま排泄されるのです。

「明日は10人ずつ班を組んで前の山へ行く。蕨・薇を採りに行く。神風班は誰々々、菊水班は誰々々」と言われ、山へ行きました。しかし、すべて採りつくされていて何の成果もありません。道端の雑草をむしり、川の水で根の土を洗い落とし、恐る恐るかじりながら帰りました。

このころから、朝起きると虱・蚤・南京虫との戦いでした。蚤は跳ねるので、手のひらで蚤の跳ね返りを弱くしたところで隣と目配せしながら同時に掛け布団をはがして蚤つぶしをしました。また、おできの痂をネズミが食べにきました。ネズミがですよ。栄養失調でも構いません。これをはらいのける元気もありませんでした。

自然の豊かさで清らかな空気の中で夜空の星を見るのが唯一の楽しみでした。

「天の川 故郷の空へ 入るかな」

国語の時間に作った俳句です。

国史の時間では、「鬼畜米英が日本へ再接近したところで神風が吹いて敵を一掃する。日本は必ず勝ちます」などという言葉が、うつろに響いていました。

そこへ「ピカ・ドン」でした。広島・長崎のニュースが入ったのでしよう。

8月15日。昼ごろ教員室に男女1人ずつ呼ばれました。何となくと思ったら、「12時から玉音放送があるから正座をしなさい」と言われ、ラジオに向かって正座しました。先生のほとんが泣き始めました。

私は「もしかしら、これで生き残れるかもしれない」と思い、待っていた級友に「日本は負けた。みんな帰れるかもしれないよ」と報告しました。

この日の夕食には、茶わん半分ぐらいでしたが白米が出ました。

「なんだ、有ったんじゃないか」と先生に言ったら、「本土決戦のための備蓄米だった」

と言われました。

8月末に帰京しました。築地へよく行きました。魚河岸に来る進駐軍からガムやチョコをもらうためです。英会話（ボディ・ランゲージ）の自習をしました。

最近カラオケを歌う機会がありましたが、近ごろの歌は知らないのです。戦後日本で初めての歌である並木路子さんの「リンゴの唄」を歌いました。バック画面に驚きました。

終戦直後の浅草・隅田川・銀座四丁目の交差点・新橋駅前の露店など、私の眼底に今も



疎開先での子どもたちの様子（出典：『写真週報』324号、提供：アジア歴史資料センター、国立公文書館蔵）

はつきり残っているものズバリでした。復興も早く、1年半もすると様変わりでした。このことが現在につながっているのでしょうか。

最後に……

★戦禍で亡くなられた多くの皆様への鎮魂の気持ちで、この一文を記しました。

★老いも、若きも今ある生命を大切にしましょう。

戦争に道德はない。
次に戦争が起きたら、
核兵器で人類は終わるでしょう。



保科彰斗(ほしな・あきと)
郁文館グローバル高等学校3年生
18歳

秋山裕香(あきやま・ゆうか)
普連土学園高等学校1年生
16歳

佐々木 嶺(ささき・りょう)
東海大学3年生
21歳

インタビュアー

血の出るような陸戦隊訓練も
国のために必死でやりました

秋山 —— 石川さんは海軍にいらしたそうですが、どうして海軍に進まれたのですか。

石川 —— 当時は高校を卒業して進学しないと、すぐ兵役が待っていました。徴兵されて兵役に行くということは、戦地に送り込まれて死ぬことを意味します。今の若い人たちは理解しにくいかもしれませんが、当時の若者にとって「兵役」や「死」というのは目の前にぶら下がっているものだったのです。だから、大学へ進学したいという若者は多くいました。

私(わたし)の場合はビジネス実務を学ぶために、神戸商業大学へ進学しました。私が養子に入った先の石川家が、明治初期から山形で貿易業を営む商家だったからです。当時はカナダに

神戸商業大学(現・神戸大学)から海軍に入隊した石川達二さんは、昭和20(1945)年当時、江田島にあった海軍兵学校で陸戦隊教官を務めていました。そんな中8月6日、広島への原爆投下。石川さんは広島市に住む姉家族を探して、2日後に現地に入りました。そこで目の当たりにした衝撃的な光景は、生々しい記憶となつて石川さんの脳裏に今も焼き付いています。聞き手となる高校生・大学生の3人は、想像を絶する原爆の悲惨さ、恐ろしさ思わず言葉を失いました。

戦争体験者 石川達二(いしかわ・たつじ)さん (95歳)

大正9(1920)年、鎌倉市材木座生まれ。高校は新潟へ。その後、神戸商業大学(現・神戸大学)へ進学。3年生のときに山形県で貿易会社を営む石川家の養子となる。昭和20(1945)年時は広島県江田島の海軍兵学校で陸戦の教官を務め、原爆投下の2日後に広島市を訪れる。戦後は日本造船に勤めた後、東京日産自動車販売株式会社へ。現在は港区に居住。





昭和19年、海軍少尉時代の石川さん

向けて、花筵（はなむすし）のごの一種（い）や絹の靴下（くつした）などの輸出（しゅつ）をしていました。

大学を卒業したのは昭和18（1943）年9月。戦争が激しくなって、当時は3年制だった大学が2年半に短縮（たんしゆく）されました（繰り上げ卒業）。海軍予備学生（だいがくせい）などを海軍の下級幹部（かきくわん）に速成教育（そくせいきよう）する制度（せいど）を志願（しがん）、同年10月、千葉県館山市の館山海軍砲術学校（たてやまかいぐんほうじゅつがっこう）に入りました。海軍に進んだのは、学友（がくゆう）で海軍に行く者が多かった影響（えいさう）です。

保科——海軍陸戦隊（かいぐんりくせんたい）というのは、どのようなことをする部隊（ぶたい）ですか。

石川——軍艦（ぐんかん）で敵地（てい）に渡り（わた）、陸（りく）に上がって実戦（じっせん）をする部隊（ぶたい）です。ですから、海軍と陸軍の両方（りやうほう）の実技（じぎ）ができてはなりません。船上（せんじょう）の訓練（くんれん）から戦車（せんしゃ）の操縦（そうじゆう）、陸軍兵器（りくぐんへいき）の使い方まで、たった1年で身につけなくてはならないのです。それだけに訓練（くんれん）は厳しく（きびしく）、まさに血（ち）を吐（は）く思いでした。でも、国（くに）を守るためには弱音（じやくおん）など吐いてはいられません。私は訓練（くんれん）中に一度（いちど）、伝染病（でんせんびょう）のジフテ

コラム27 ● 広島と原爆

昭和20（1945）年8月6日午前8時15分、アメリカ軍が広島市に原子爆弾（げんしばくだん）を投下（ていげ）した。これが人類（じんるい）史上、最初に実戦（じっせん）で使われた核兵器（かくへいき）である。この原子爆弾（げんしばくだん）は「リトルボーイ」と呼ばれ、ウラン235が使われている。全長3.12m、最大直径0.75m、総重量約5t。炸裂（さくれつ）と同時に強烈（きやうれつ）な熱線（ねつせん）と放射線（ほうしゃせん）が四方（しやうほう）へ放射（ほうしゃ）され、周囲（しゅうい）の空気（くうき）が膨張（ぼうちやう）して超高压（ちやうかうあつ）の爆風（ばくふう）が吹いた。中心温度（しんしんおんど）は100万℃超（ちやう）、爆心地（ばくしんち）周辺の地表面温度（ちめいめんおんど）は3,000～4,000℃にも達した。焼失面積（しやうしつめいせき）約13km²、死者（しやうじや）約12万人（ふしやうしや）、負傷者（ふしやうしや）約8万3,000人、全焼全壊（ぜんしやうぜんくわい）6万棟（まんとう）以上という甚大（しんたい）な被害（ひがい）をもたらした。



米軍機が愛媛県松山市上空から撮影したきのこ雲（撮影：US Army、提供：広島平和記念資料館）



そこには、
目を疑（うたが）う光景（こうけい）ばかり
が広が（ひろ）っていた

腕（うで）の皮膚（ひふ）がだらんと
垂れ下（た）がったおばあさん

10メートルごとに
連なる死体（したい）の山（やま）

真っ黒（くろ）になった
死体（したい）がびっしりと
浮かぶ川（かわ）

※マンガは、現代の若者が戦争・戦災を追体験するというコンセプトで描かれています。

リアにかかって入院したことがありますが、軍医に高熱を隠して無理やり訓練に戻りました。「戦争で死ぬならともかく、病院で死ぬのだけは嫌だ」と思ったのです。

佐々木——訓練を終えた後は、どうされましたか。

石川——内太平洋、サイパンに配置を命じられました。サイパンには連合艦隊がたくさんいて、配置先としては優位な場所です。我々の部隊は一部が小戦闘艦で、一部が飛行機でサイパンに行くことになり、私は戦闘艦組でした。サイパンにはサトウキビがいっぱいあって、砂糖がおいしいのです。戦時中は甘いものに飢えていましたから、飛行機組は「先にサイパンで砂糖を食べているよ」と嬉しそうに飛び立っていきました。

戦闘艦組は後から島の近くまで行ったのですが、爆撃が激しくて先に進めなくなっていました。我々としては自力で泳いで島にたどり着く覚悟だったのですが、艦長が「横須賀へ引き返す」と言いました。軍隊では上官の命令には絶対服従ですから、悔しい気持ちをこらえてみんなで横須賀に戻りました。後で判明したことです。飛行機組の仲間は全員玉砕して亡くなっていました。戦争というのは、ほんの少しのタイミングや選択の違いで生死が分れます。そういう意味では、私はとても運が良かったのでしょう。

原爆投下後の広島は 10メートルごとに死体の山でした

秋山——横須賀に戻った後はどうされましたか。

石川——千葉の館山に戻り、砲術学校で陸戦の後輩に1年間教えました。その後、昭和20（1945）年に、中尉昇任と同時に広島県江田島の海軍兵学校への配属を命じられました。

佐々木——では、8月6日、原爆投下の日のことを教えてください。石川さんはどこで何をされていましたか。

石川——前日の8月5日、300人の学生を連れて夜間演習があり、8月6日の朝はそれを終えて宇品に戻る途中でした。頭上をたくさんさんの戦闘機が飛び交うので「変だな」と思ったら、突然、広島市方面の空が白く強くビカーッと光りました。続いてドーンと爆風を感じました。私はとっさに学生たちに「伏せ！」と叫びました。

爆風が止んでから当番の学生に山の向こうを見に行かせると、「ガスタングが爆発したようです。広島島のほうに白い煙が上がっています」との報告でした。

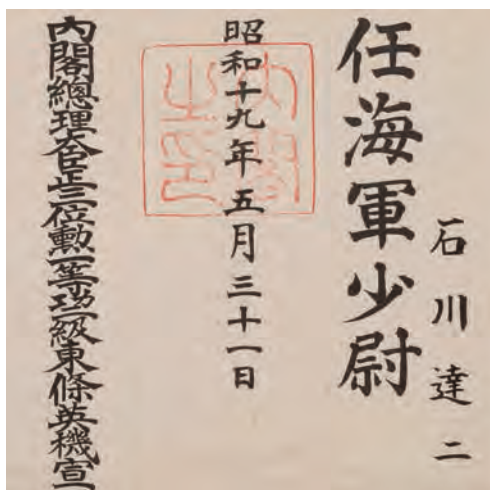
そうしているうちに、空の向こうから真っ赤な血のような色をした雲がこっちにやって来るのが見えました。私たちは確かにこの目で不気味な赤い雲を見たのですが、この現象はどの資料を見ても記述されていません。あれが何だったのか、なぜ誰も書いていないのかは分かりません。

コラム28 ● 長崎と原爆

広島に原爆が投下された3日後、昭和20（1945）年8月9日午前11時2分に、アメリカ軍は長崎市にも原爆を投下。この人類2発目の原爆は「ファットマン」と呼ばれ、全長3.25m、最大直径1.52m、総重量約4.67t。広島に投下されたリトルボーイよりサイズが大きく、威力も1.5倍強かった。また、プルトニウム239という毒性の強い放射性物質が用いられていた。長崎市の起伏に富んだ地形により広島と比べ被害は少なかったものの、死者約7万4,000人、負傷者約7万5,000人、焼失面積6.7km²、全焼全壊約1万3,000棟という被害をもたらした。



原爆投下後の市内の様子。中央にわずかに残る建物は浦上天主堂（撮影者：林重男、提供：長崎原爆資料館）



昭和19年、石川さんが海軍少尉に任ぜられた時の任命書



昭和18年、石川さんが海軍へ入隊した時の寄せ書き

保科——原爆のことを知ったのはいつですか？

石川——その日の夕刊で「広島に特殊爆弾が落ちた」という記事を見ました。ただ、この段階では核爆弾であることは分かっておらず、何か特殊な爆弾であるとして書かれていませんでした。翌日7日になって軍令部から、原子力研究で有名な仁科芳雄博士が来られたという話がありました。私は専門外だったので博士の説明を十分には理解できなかったのですが、たしか「ウラニウム1キログラムを水1トンで囲ったものを、上空500〜600メートルで核分裂させた爆弾だ」という話を聞いたと記憶しています。

原子爆弾だと聞いて、海軍では技術将校たちが「ああ、これで日本は戦争に負けた」と言っていました。中には「これから特攻だ」と意気込んでいる人間もいました。

秋山——原子爆弾だと知った翌日に、石川さんは広島市に行かれたのですよね。

石川——今なら核の恐ろしさが分かるから行かないと思いますが、当時は知りませんでしたから。私の一番上の姉夫婦が子ども2人と広島市に住んでいたのです。今でいう原爆ドームの近くを流れる太田川のほとりです。私は姉家族が死んでしまったものと思い、骨を拾ってやりたくて1日だけ休暇をもらって広島に入りました。

広島以西、宇品から上陸して、市中心部へ歩いていきました。そこには、まさに地獄絵図というべき阿鼻叫喚の光景が広がっていました。

した。10メートルごとにあちにもこちにも死体の山……。どの死体も黒焦げで、個人の判別どころか男女の区別もつきません。ただ、私は軍人ですから、死体を見て取り乱すことはできません。表面的には平静を装いました。

しばらく歩いていると、焼けた民家のトタンの中からおばあさんが「兵隊さん、兵隊さん」と私を呼びました。「水をお持ちでしたら、少し分けてください」と言うので私が持っていた水筒を差し出すと、おばあさんが腕を伸ばしてきました。その手に袋を下げているのかと思ってよく見ると、それは長くだらんと垂れ下がった皮膚でした。私はその場にいて耐えきれなくなり、「気をつけて」とだけ言って急いで立ち去りました。

姉の家に着いてみると家は丸ごとなくなっていました。辺りを探しましたが、人らしき姿はありません。仕方なく昼ご飯でも食べようと思い、海軍でもらった弁当を開くと、おかずに入っていたのがコンビーフでした。コンビーフの色と、目の前の川に浮かんでいる死体の色がそっくりで……。多摩川ぐらいの広さの川に、真っ黒になった死体がびっしり浮かんでいました。さすがに食べる気が失せて、弁当は捨てました。

次に広島駅へ行ってみると、駅前にある立派な9階建てのデパートの床が上から下まですべて抜けていました。上からの圧力で床が抜け、外壁だけが残ったのだという事実には、爆発の威力を思い知りショックを受けました。駅には、つり革につかまったまま真っ黒になった死体がいっぱい詰まった路面電車がありました。



コラム29 ● 原爆による被害

高線量の放射線を被曝すると全身の脱力感、吐き気、嘔吐などの症状が現れ、数日のうちに発熱、下痢、吐血などで全身が衰弱して、多くが10日以内に死亡する。死亡を免れても、放射線は長期にわたり健康被害をもたらす。特に骨髓、リンパ節、脾臓などへの影響が大きく、脱毛や出血、口や喉の病変、白血球の減少などが起こりやすい。最も恐ろしいのは、放射線によって臓器のがんや血液のがんなどが誘発されること。被爆者には甲状腺がん、皮膚がん、白血病などが多い。また、妊婦が被曝することで胎児が放射線の影響を受けることもある(胎内被曝)。



全身熱傷の被爆者
(撮影：尾糖政美、提供：広島平和記念資料館)

石川さんからのメッセージ

先日、ロシアのプーチン大統領が、クリミア半島の併合時に「核兵器の使用を準備していた」と言いました。核兵器が恐ろしいのは、このように「持っている」と使ってしまうことです。戦争には道徳などありません。いったん始まってしまえば、日頃の常識など吹き飛んでしまいます。「勝つこと」がすべての正義となり、手段を選ばず人を殺すようになるのです。現在、国連の数力国が核を保持していますが、「お互いに核は使わないでおきましょう」などと約束を交わしたところで、戦争になれば簡単に破られてしまうでしょう。最新の核爆弾は、1発の威力が広島に落ちた原爆の何十倍にもなると言われています。こんなものが投下されたら、どうなると思いますか。核爆弾が落とされたら、落とされた側が報復として核爆弾を落とし返すでしょう。そうなったら核兵器を落としあう、核合戦です。最初の1発は地球上のどこで誰が落としても同じ。被害は全世界に広がって、人類は間違いなく滅びます。私は原爆の被害をこの目で見たから分かります。1発使った時点で人類ごと滅ぶのだとしたら、結局、核兵器を持っていようと持っていないと同じことではありませんか。だったら、日本は核兵器を持つべきではありません。この国はすでに一度、核の恐怖を味わっているのですから、そんな無駄なものは持たなくていいのです。本当はすべての国が核兵器を捨てることできれば一番良いですね。けれども、現実問題として無理でしょう。核兵器は一度持つと手放せないものです。私たちができることは、みんなで考え話し合うことです。この地球上に核兵器がある以上、次に戦争が起こったら人類が終わることを覚悟して、今後どうしていくべきかを議論してほしいと思います。



その日の夕方に私は広島を引き上げ、江田島に帰りました。姉家族が全員生きていたことは後で知りました。姉と子どもたちは戦況を見て疎開していて難を逃れたのです。広島に残っていた義兄は朝食中に原爆に遭い、爆風で崩れた家の梁の下敷きになって背中に火傷を負いましたが、兵隊が来て救助されました。義兄が言うには、爆弾がピカッと光ってドンと爆音と爆風が来た後、すぐには火が出なかったそうです。すぐ火事になっていたら火傷がひどく、助かっていなかったかもしれません。

私はと言えば、広島から帰った翌日から体の調子がおかしくなりました。頭が重く、肌の色が黄疸で真っ黄色に……。軍医に見せると、「鞏丸と肝臓をやられている」とのことでした。しかし薬もなく、寝ているばかりでした。

不思議なことに10日ほど入院していると、症状は自然と治っていきました。そのとき以来、原爆の後遺症が出ることはなく、2人の子どもにも恵まれました。原爆投下直後、広島に放射能を含む黒い雨が降りましたが、これに当たった人は大半が亡くなったと聞きました。私はつくづく運の良い人間なのだと思います。

あと10日早ければ……

鈴木徳子さん（81歳）

父は軍人で現在の北朝鮮に配属されていたため、私は北朝鮮の羅南公立国民学校に入学しました。校庭に水をまき凍った上でスケートが出来るほど冬は寒い所でした。父が突然南方のスンバ島に転勤になったため、私たちは家族は日本の広島の実家に疎開しました。

あの昭和20年8月6日8時15分、私は国民学校5年生で、近所の友だちと夏休みの勉強会を始めた時でした。爆心地から4キロメートル位も離れた所でしたが、空は薄暗くとても恐ろしい状態でした。黒い雨が降り、異様な空気の中急いで家に向かいました。家の裏を流れる安川の土手には、全身に火傷をしている人の歩く列が続いていました。髪は燃え、手の先には焼けた皮膚がベトベトで手の先にぶら下がっていました。男女の区別もつかない人々の行列でした。家にもどると何人

もの方々が倒れ込んでいました。その朝早く、

妹の治療のため爆心地の近くの病院に出掛けていた母が帰ってこないのです。私は独りで母と妹を探すため、爆心地の方向に夢中で歩きました。何もかも壊れ、そこが道路かどうかも分かりません。水槽に頭を突っ込んでまぐなくなっている人が沢山いました。いくら探しても、母も妹も見つかるはずがありません。川にかかる橋も全部壊れていました。川には多くの死体が浮いていました。ぼろぼろになった姿の知らないおじさんに「ハヨ一家ニモドランカ」とひどくしかられ、引き返す道の方向の列について帰りました。暗くなるころ運良く家にたどり着くことができました。祖母にも近所の人たちにもひどくしかられました。夜になっても、母も妹も帰ってきませんでした。その夜、屋根が残った家には息たえだえの人たちに休んでもらい、家族は烟で眠りました。

2日後、母と妹が生存していると連絡があり、祖母と親類の人がリヤカーで迎えに行き

ました。母も妹も衰弱してぼろぼろで見るかげもありませんでした。妹は間もなく亡くなりました。母は心身ともに苦しんでいました。高い熱、口からは黒いような血をはき、頭も顔も見erkかげもありません。足も大怪我をして立つことも出来ませんでした。

戦地に行ったまま連絡のとれない父と、4人の子どもを案じ懸命に頑張ってくれましたが、苦しみのもとに亡くなりました。

町内でも多くの人が次々に亡くなり、火葬する場所もなく、川の土手で火葬をしていました。母も同様でした。

8月15日の終戦の日があと10日早ければどんなによかったかと思っています。亡くなられた多くの方々のご冥福をお祈り申し上げます。

戦争は二度と嫌だ！

広島に原子爆弾が投下され
母と死別 母をかせせ！

高木恭之さん（80歳）

昭和20年8月6日、広島に原子爆弾が投下された。私は9歳だった。国民学校の学童疎開で安佐郡戸山村浄宗寺に疎開していた。

ちょうどその時は月曜日の修身の授業中だった。

窓越しに広島方面を眺めていたら、きのこ雲がちょうど目に映った。と同時に、ドーンと聞こえた。即全員集合！ 校長先生より「広島方面に爆弾が投下された」と訓辞があった。全員で下校した。お寺に着くと、ものすごい雨が降り出した。

しばらくして、広島方面より、火傷をして顔が黒こげになった人、黒こげの荷物を載せた大八車、リヤカーなどが押し寄せた。我々は防空壕の生活だったが、蒸し暑くて中に入っていられない。友人と、学校が避難所なのでこっそり抜け出しているのぞきに行った。その時の異臭は忘れられない。

8月末に帰宅することになった。寮長より、

今まで隠していたことがあると告げられた。両親死亡2組、片親死亡3組。その中に私が入っていたようとは。大好きな福原先生が私の横に座っておられたので納得した。トラックの中で泣きじやくり、涙がなくなった。

母が、たしか6月に慰問に来た。本堂で寝泊まりをしていた時だったが、母が虱を見つけて大駆除。寺の平釜で湯を沸かし、全員下着等を煮沸し、干す。

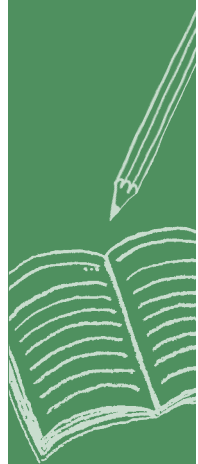
母が最終バスに乗り遅れて1泊したが、甘えることはできなかった。残念！ 9歳の子どもに、死が理解できますか？

被爆の日、母は勤労奉仕で爆心地にて作業中だった。帰宅して4日間生きていたが、私は死に目にあえなかった。妹が、母は苦しんでも妹の体は放さなかったと、70年目の年に初めて語ってくれた。美人の母で、子どもながらに自慢でした。

父親が死ぬ1年前に、母の遺品5点を広島平和記念資料館に寄贈した。永久保存になっている。これからも港区被爆者の会で核廃絶運動の手助けを致したいと思っています。



広島・八丁堀付近の電車通りで被爆し、全焼した路面電車（提供：共同通信社）



私は海軍の通信兵でした

●佐藤良雄さん（92歳）

終戦の思い出はどこも焼け野原で、都会に暮らしていた方たちは田舎に引っ越したり、知人、親戚の家にお世話になる人が多く、親戚や知人・他人の世話にならない方たちは、駅前広場やガードの下に毛布を敷いて寝て生活して居る人が多数いらっしやいました。食べ物や露店に売っているおにぎりや代用食品で生活をして、働くところも無く、大勢の方たちは職を求めて、東京港に輸入されて来る米、大豆、麦等の貨物船の作業や、荷物の積み降ろし作業に従事していました。東京港芝浦埠頭に働きに、朝の1番電車に乗って、大勢の労働者が約2千人位集ってきて、重労働の作業をしていたものです。

私は働く労働者の軍手、地下足袋、作業服を売っていました。働く方たちの食料は、露店の食堂で朝早くから供されていて、大変にぎやかでした。また、夜通し働いてきた労働者は汚れた真つ黒な姿で食事をしていました。敗戦の国の国民は哀れでした。平和になって、現在の子どもたちは何も知りません。

あのころ、あれこれ

（昭和22〜25年）〜中学生時代〜

●杉山忠男さん（81歳）

平成27年（2015年）1月に傘寿を迎えて、あらためて子どもたちを振り返ると、記憶もおぼろげです。中学生の時期は昭和22年4月から25年3月までの3年間、敗戦直後

で戦災の爪あととも生々しく残っていた時期です。
昭和20年8月15日の玉音放送は、縁故疎開先の愛知県三河三谷の小学校校庭で聞きました。

間もなく親の迎えにより帰郷すると、上空に進駐軍のヘリコプターが乱舞していて、東京駅に着くと頭から背中までDDTの白い粉を吹きかけられ、手荒な歓迎を受けました。駅の売店では『日米会話手帳』が並んでいて、敗戦国民が、今まで禁止されていた敵性外国語の本を争って買いました。36ページ定価80銭で、360万部も売れたそうです。戦後のベストセラー第1号と言えるでしょう。

戦前麻布飯倉にあった家は5月の空襲で焼け、手づるを求めて飯田町、それから赤坂の氷川町に転居していました。町内の氷川小学校は定員過剰で受け付けてもらえず、遠い檜

hey、カモン、ドンマイ、ガッデムなどはGーから聞き覚えたものです。後の英語学習にどれだけ役に立ったやら？

当時は家といっても風呂屋の焼け跡で、2坪半ほどのコンクリートの部屋に鉄の扉が1枚、あとは煙突に直結するたき口があるだけ、風呂屋の釜焚場だったところです。

家族は両親と祖母、兄2人とわたし計6人の大所帯です。父は塗装業を自営していましたが、敗戦後は廃業して大手ペンキ会社の塗装工となり、海軍省の職員だった長兄は戦後厚生省に勤務、業務は復員局で引き揚げ者の事務でした。次兄は工業学校生で学校も焼けてしまい、虎ノ門にあった進駐軍のモータープールで、年齢を詐称してジープの運転手として働いていました。次兄は器用で、半年後に風呂屋の焼け跡を片付け、洗いの男女の仕切り壁を利用して掘った小屋を建てました。材料は古丸太、焼けトタンなどをあちこちからかき集め、時には大八車で多摩川の六郷橋あたりまでいったそうです。焼けトタンだから穴も開いていて、穴を通して星も見えます。雨の日はくぎ穴程度ならポンチで

町小学校の5年に編入されます。小学校卒業の年、昭和22年に教育基本法と学校教育法が施行され、六・三・三・四制（六三制）、男女共学で新制中学までの9年間で義務教育となりました。

新制中学の初年度は諸事情により、都立一中（現日比谷高校）内に急ぎよ併設された新星中学、男子のみ2組、教員は校長をはじめほとんどが一中の先生で、なかでも音楽は、ライオンとあだ名された梁田貞先生がシューベルトの「冬の旅」やイタリアのカンツォーネを原語で熱心に教えてくださいました。北原白秋の「城ヶ島の雨」や「どんぐりころころ」の作曲者です。

第2年度は外苑中学校を受け入れ、2つの学校が合併して青山中学が誕生、青南小学校に間借りして男女共学が始まりました。青山中学1期生です。青山二丁目の陸軍大学跡地に移転したのは、昭和30年の話です。

氷川町のわが住まいは、氷川神社の参道を出て氷川坂、右を見れば三井財閥の屋敷跡、左に坂を下って50メートル程に位置し、まっすぐ行った台地上は軍の連隊宿舎があり、戦

後引き揚げ者住宅に転用されていました。後にTBSとなりました。氷川小学校に隣接して勝海舟の邸宅、近くには巨人軍の名投手スタルヒンの居宅があつて、焼け残りの門柱には外国人名が時局に合わないとして須田博の表札が架かっていました。

多くの洋館は占領軍に接収されていて、わが家と神社の間にある立派な庭園を持つ洋館もオランダ将校の家族が住んでいました。ジョンという10歳ぐらいの外国人の子どもが珍しく、からかつては遊んだものです。

氷川坂の我が家の近くには割烹魚屋、母娘が営むタバコ屋、正妻ともう一人の女の人が同居しているタクシーの運転手家族の家があり、更に進むと、派手なスカートを巻いた年ごろの娘がいる元ペンキ屋で、米兵がちょいちょいジープでやって来ては連れ出していました。近所ではオンリーさんと噂していましたが特別に蔑視するわけでもありませんでした。子どもたちはジープを取り巻いて「ギブミー チョコレート」、「ギブミー チュウインガム」と連呼し、道にはらまかれた菓子をわれ先に取り合ったものです。



昭和21(1946)年4月、戦後の食糧不足に悩む都民のため、芝新堀町で計1万人分のおかゆがふるまわれた(提供:朝日新聞社/時事通信フォト)

いう大きな書店と古書店があり、近くには俳優座のけいこ場が窓越しにのぞけたのです。昭和21年12月20日に発売された第6回宝くじは、1枚10円、1等賞金10万円、2等5万円、他に景品として特賞・ラジオ受信機(四球式、真空管3本)、甲賞・蝙蝠傘20本、乙賞・化粧石けん3千本。当時の生活レベルが推測できるでしょう。

両国の川開きが復活し氷川町の三井家の土手から花火を見たのは昭和23年でした。翌24年東京都は失業対策事業で働く日雇い労働者の日当を240円と決定。二「ヨソ」と称して、日雇い労働者の代名詞となりました。

そのころの子どもの遊びは野球が主流で、青中前の道路で三角ベースをしたり、アメリカ大使館前の空き地で試合もしました。

道具も手作りが多く、雑誌『野球少年』(昭和22年創刊)には型紙つきミットの作り方が載っています。

赤坂の弁慶堀でヘラブナ釣りをしました。ベーゴマ、めんこ、漫画本も楽しみでしたね。

外向きに縁をたたいておけばわずかな雨漏りはしのげました。地面に土があればキュウリ、ナス、トマトなどの家庭菜園です。屋根にはカボチャ、大財閥の不在屋敷地で小麦を収穫したこともあります。昭和22年に東京地裁の山口判事がヤミ食糧を拒絶して餓死した事件は痛ましい現実でした。食糧難で買い出しにも行きました。外食券なしでは外で食事ができません。米以外の主食(そば、うどん、パン)が外食券なしで食べられるようになったのは昭和25年5月のことです。

住まいは風呂屋の跡地ですが風呂は有りません。数少ない銭湯を利用しました。下駄は脱ぎ捨ててはいけません。衣服に包んで脱衣籠に安全確保します。石けんは苛性ソーダで自家製造します。皮膚の荒れは承知の上です。進駐軍愛用の舶来化粧石けんは香りといい、落ちといい高嶺の花でした。良い石けんは湯船につかるときは手ぬぐいで包んで頭に縛りつけます。

犯罪事件も多く、警視庁が110番の警察呼び出し番号を設置したのが昭和23年10月でした。昭和24年7月には、下山事件、三鷹事

件が相次いで発生しています。

周囲は焼け跡だらけで、土蔵と焼け金庫だけが目立っています。その金庫からは台車の車輪が取り外され、リング箱に取り付けられて、配給物の運搬に利用されました。廃物利用です。世の中に無駄なものはありません。

庶民が物を運ぶのには自転車が普通で、荷が増えればリヤカーを接続し、大きい荷物は八八車、更に大きくなれば馬方が荷馬車をひきました。

オート三輪車も昭和25年ごろまで活躍しました。マツダ、ダイハツ、くろがねなどの名前がすぐに浮かんできます。芝公園の道路で、自転車の運転をけいこしていたところ、荷馬車にぶつかりそうになり、馬方を大慌てさせたこともあります。

配給は、質よりも重量を優先した悪名高いサツマイモ農林1号、スケトウダラ、時には米軍の放出生話などもあり、野坂昭如の小説『アメリカひじき』のように紅茶の茶葉に馴染みもなく、ひじきと勘違いして煮てしまう悲喜劇もありました。どの家にも電気パン焼機があって、両端に電極をつけた簡便なもの

で必需品でした。煙草は配給が不足がちで、きざみ煙草を巻き煙草に加工する煙草巻き機で自家製することも多く、巻き紙として多くの辞書が重用されました。進駐軍の吸いかけのシガレットを拾い集めて再生する専門家はモク拾いと呼ばれました。

道路に電信柱の焼け残りが50センチほどあれば見つけ物です。貴重な燃料です。掘り下げると地下にはあと1メートルはあります。防腐剤のコールタールが染み込んでいて、それはよく燃えますが、欠点は顔も手もすすで真っ黒になることです。

新星中学へは徒歩通学でしたが、青山中学は都電通学となりました。筆筒町から六本木經由高樹町まで。昭和23年に空襲で焼ける前に住んでいた麻布にわずかな土地を買い求め、3Kの一軒家を新築しました。通学は赤羽橋から六本木乗り換え高樹町下車、停留所から青南小学校内の青山中学校まで300メートル約5分弱でした。学校の斜め向かいには、根津邸があり、いまは根津美術館として優れた国宝を展示しています。

六本木乗り換えは楽しみが多く、誠志堂と